

福沢研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第12号 2010年3月31日 発行

目次

* 2009年夏の大阪……………	2	* 主な新収資料……………	9
* 「福沢諭吉と神奈川」展を終えて……………	3	* 主な動き……………	10
* シンポジウム・講演会概要……………	4	* センター諸記録（2009年8月～2010年2月）……………	11
* 福岡展・展示報告……………	7	* スタッフ一覧……………	12



手古奈像の現在のすがた



昭和21年春撮影の手古奈像

* 図書館玄関ホールに再設置された手古奈（北村四海作） 明治42年（1909）*

この大理石彫刻は、現在福沢研究センターがある図書館（旧館）完成時より、ホール大階段の左脇に安置され、塾生を見守り続けた。しかし、昭和20年（1945）5月の空襲により建物とともに被災、両腕を失い、腰の辺りで二つに大きく割れてしまう。戦後地下倉庫に放置されていたものを、平成17～19年にかけてアートセンターが中心となって修復、昨年9月14日、戦前とほぼ同位置に再設置された。——手古奈像については以上のように語られてきた。ところがこの来歴とは食い違う写真が福沢研究センターにある。昭和21年春の写真（上右）で、黒く煤けつつも大きな損傷は見られない手古奈が写っているのである。そのおよそ1年後に撮影された写真（『未来をひらく福沢諭吉展』図録参照）では、腕が失われているものの、まだ割れずに台座に立った姿がある。とすると、この像が腕を失ったのは少なくとも戦災半年後、割れたのはさらに後ということになる。腕は、ある時期に人為的に破壊されたものではないか。また、大きく割れたのは、昭和22年末に図書館建物の修復が始まる際、像の移動などによるものではなかろうか。表面に残る多数の白い傷は、戦災後手荒に扱われた痕跡のように思われる。

義塾の苦難を物語る作品であることに変わりはない。しかし、戦災によるとされる損傷が、すさんだ戦後の風景を映す傷であるとする、なお一層痛ましく思える。（都倉）

2009年夏の大阪

～～「未来をひらく福沢諭吉展」大阪会場、
福沢研究センター講座の開催～～

こ ぎ き ゆ き こ
小 崎 由 紀 子

(慶應大阪リバーサイドキャンパス事務室職員)

1. 巡回展、大阪会場の開催

日本一暑いと言われる大阪の夏。2009年1月に寒い冬の東京で始まった巡回展は、春の福岡会場を経て、その最終会場として2009年8月に灼熱の地、夏の大阪へやってきました。大阪は175年前の天保5（1835）年に福沢が誕生し、青春時代を適塾で学んだ福沢原点の地です。

2009年8月3日（月）、元住友財閥の邸宅であり、重厚な竹まいの大阪市立美術館に、関西地区の塾員と大阪市長そして清家塾長が一堂に会し、大阪展の開催を宣言するテープカットが行われました。この日から9月6日（日）までの一ヶ月間、暑い大阪の夏をさらに暑くする大阪展がスタートしました。開催の2週間程前から電車の吊り広告やタウン誌の表紙等を福沢の肖像画が飾り、慶應義塾の大阪拠点である慶應大阪リバーサイドキャンパスに勤務する私は、展示会の開催が近づき徐々に大阪の熱気が盛り上がってくる様子をひしひしと肌で感じていました。

大阪展は、地元からの協賛企業が26を数え、大阪慶應倶楽部をはじめとする関西地域の三田会および多くの塾員の方々の支援のもと、主催となる大阪市立美術館・産経新聞社・慶應義塾三者の協力によって実現した展示会でした。

展示は東京展・福岡展と同じ7部の構成で成り立ち、第1～6部は福沢の遺品、書幅、書簡、自筆草稿、著書といった資料を配置して福沢の思想と活動の輪のひろがりを紹介し、第7部では地元大阪の実業家であった阪急・東宝グループの創始者、塾員・小林一三氏をはじめ、福沢に教えを受けた門下生らが収集した美術コレクションの名品が展示されました。大阪展用のみ準備された展示品もあり、特に福沢と大阪のつながりを強く表す適塾関係の資料やパネルが展示されるコーナーや、明治初期にあった慶應義塾の3つの分校を紹介する特別コーナーでは参加者の多くが長い時間を費やして展示に見入っていたのが印象的でした。

また、福岡展で好評だった「学問のすすめノート」の大阪版が準備され、教育的活動の実施を目的に市内の小中学校へ事前配布し、また中学生以下の入場者には無料配布もしました。事前の宣伝に加え、会期が夏休み期間であったことも幸いし、ノートを持った親子連れの姿が数多く見受けられました。

会期中は7回の講演会、塾員・藤岡幸夫君指揮による関西フィルハーモニーのコンサート、茶道 武者小路千家 官休庵による2回の呈茶席が企画され、展示を見に行く以外の楽しみも併せ持つ企画満載の展示会でした。

これらは創立150年記念事業室や塾員センターを中心とする義塾教職員の入念な準備と頑張り、そして大阪市立美術館員と産経新聞社スタッフの献身的な働き、また、西沢准教授、都倉専任講師をはじめとする福沢研究センタースタッフの様々な苦勞によって作り上げられたものです。このような内容に魅せられた私は、会期中都合7回会場を訪れ、充実した時間を過ごすことができました。

2. 慶應大阪リバーサイドキャンパス (KORC) の紹介

慶應大阪リバーサイドキャンパス (KORC) は、大阪開催前年の2008年5月に慶應義塾創立150年記念事業の一環として開設された義塾の新しいキャンパスです。慶應義塾最初の分校「大阪慶應義塾」を現代に甦らせ、福沢精神を伝播する新たな教育・研究・地域社会貢献・人材交流の関西地域での拠点となるべく開設されました。ここでは、大学説明会や通信教育課程の夜間スクーリング、そして学位のプログラムにはよらない各種講座を開催しています。なお、堂島川を臨まれる立地にあることで「リバーサイド」の名称が付くキャンパスからは、歩いて直ぐの堂島川玉江橋北詰に福沢諭吉誕生地記念碑があります。

3. 福沢研究センター講座の開催

KORC の設立趣旨のもと、福沢研究センターの全面的な協力を得て開設初年度からスタートしたのが福沢研究センター講座です。福澤精神を涵養する当講座は、毎回50名を超える受講者に恵まれ、KORC の人気講座となっています。今年のテーマは「近代日本と福沢諭吉」。2009年7月から全7回の講義を毎月1回土曜日の午後に行いました。

8月8日の第二回講義では、KORC 内での講義終了後に大阪展へ会場を移し、当日を担当した福沢研究センター都倉専任講師による解説付きの見学会を行いました。スタート時35名いた講座受講生に加え、会場を訪れていた一般のお客様もいつのまにか合流し、期せずして公開講座の様相を呈することになりましたが、最良の教材を前に福沢の生涯と業績を学ぶまたとない機会となりました。



冒頭にも記しましたが、2010年は福沢生誕175年の年。そして大阪展の開催を支えてくださった大阪慶應倶楽部は創立80年を迎えます。夫々の記念の年を祝し、大阪の地において「記念の会」の開催を2010年7月16日（金）に予定しています。また今年も暑い夏がやってきそうです。

「福沢諭吉と神奈川」展を終えて



てら さき ひろ やす
寺 寄 弘 康
(神奈川県立歴史博物館 専門学芸員)

神奈川県立歴史博物館にとって久しぶりの感覚をよみがえらせてくれた展覧会であった。入館者数は有料5,135名、無料11,091名、合計16,226名を記録した。2万人という目標には届かなかったものの、歴史博物館と改称した1995年以降の展覧会としては、入館者数は歴代7位、一日当りでは約560人の歴代3位に相当する。会場の特別展示室はもとより常設展示室、ミュージアムショップや喫茶室も、連日人であふれていた。事務方の話では、例年以上にトイレトペーパーの消費量が増えたそうである。当館の特別展の入館者数は平均一万人で、何時いっても混雑しておらず、ゆったりと見ることができるとして一部のファンから好評(?)を得ていたのであるが、さすがに今回ばかりは「福沢諭吉」というビッグネームのおかげか、慶應義塾のマンパワーによるものか、幸いにして入館者数だけでなく内容も充実した展覧会であったと当館では評価している。

慶應義塾創立150年を記念した展覧会について当館に打診があったのは3年余前、2006年11月のことである。2008年暮れから翌年にかけて、東京を振り出しに福沢諭吉と縁のある九州、大阪、神奈川で巡回展をおこないたいという申し出を受けて、館内で議論した。「慶應義塾創立150年記念」という冠称だけでは、貸会場的な展覧会と見られてしまうと、2009年度の展覧会開催計画がなかばフィックスして開催時期に制約があるなどの問題点が出た一方で、展示予算面や入館者の大量動員といったメリットもあるなど、館内での議論は百出した。その結果、展示内容については、会場が狭いことや東京会場と同一内容では入館者が望めないことから巡回展ではなく独自の企画内容とすること、開催時期は2009年夏とすることなどを条件に、展覧会開催を決定した。翌07年7月から慶應義塾側と歴史博物館側との打合せがはじまり、福沢研究センター所員と当館学芸員との間で展示内容を具体化する作業を何度も重ねていくなかで、福沢と神奈川との関わりに焦点をあてるという意味から「福沢諭吉と神奈川」という展覧会名称となった。

福沢と神奈川とのエピソードを調べにつれ、さすがに

1世紀以上の研究史を有する人物であるが故に、これぞという新発見のエピソードを見つけることはできなかった。県内各地を調査してみても、すでに先学により紹介されているできごとばかり。そこで方針転換。知られているエピソードであっても、これまで紹介されなかった新しい新出史料を見つけることに決めた。この結果、横浜商業学校(Y校)の史料、箱根福住旅館の日記などをはじめで紹介することができた。なかでも大きなできごとは、福沢研究センターの尽力でルイス・クニフラーの肖像写真を本邦初公開できたことである。それまで『福翁自伝』の記述など文字でしか知ることのできなかったクニフラーを、具体的なイメージとして認知し、次なる研究へのステップを踏み出すことが、この肖像写真により可能になったといえる。こうした新出史料との出会いこそ、学芸員にとって展覧会の醍醐味の一つといえる。

会期中、展覧会を見た方から福沢と神奈川との関わりがこれほどあるとは知らなかったという感想が多く寄せられた。東京に隣接するという地理条件もあるにせよ、これほどまでに神奈川に関わりがあるとは、担当者ですら思っても見なかったことである。福沢諭吉という存在とその思想的影響力が、神奈川県内においてもひときわ大きな福澤山脈を形成したこと、そしてその山脈が連続と現在へつながっていることを改めて認識できた点で、担当者としても大きな成果を得た展覧会であった。2008年のイベントからはじまった横浜開港150年(神奈川県開国・開港150年メモリアルイベント)の記念展覧会の有終を飾るにふさわしい展覧会であり、これに関わることができたことは幸せなことであった。

展覧会開催に至るまで、東京・九州・大阪の巡回展や『慶應義塾史事典』の編さん作業などを抱えながらも、神奈川会場のプランや展示物について様々なご教示やご提案をいただいた福沢研究センター所員の無限のパワーに驚くと同時に、常に学問的刺激を与え続けてくれたことに感謝の言葉しかない。福沢研究センターをはじめ創立150年記念事業室、広報室など慶應義塾の関係者の皆様に改めてお礼申し上げます。



家族とは何か

—福沢諭吉の女性論・家族論を通して現代を考える—

にし ざわ なお こ
西 沢 直 子

(福沢研究センター准教授)

福沢研究センターでは、創立150年記念展覧会「福沢諭吉と神奈川」展開催中の神奈川県立歴史博物館において、2009年8月29日午後2時から110人の参加者を迎え、「シンポジウム 家族とは何か—福沢諭吉の女性論・家族論を通して現代を考える—」を開催した。

日本の近代化過程の中で福沢が描いた新たな家族像は、「一家団欒」に象徴される明るく個人の支えとなる集団であった。慶応4(1867)年に出版された『西洋事情外編』のなかで、「人間の交際は家族を以て本とす」「凡そ世間に人情の厚くして交の睦きは家族に若くものなし」と紹介して以来、福沢は常に家族をポジティブにとらえ、晩年に至っても、結婚は苦勞も多いが「差引して勘定の正しきもの」(『福翁百話』)、つまり自分にとって必ずプラスになるものであると主張した。家族とは「親友の集合」体であり「人生活動の区域を大にする」(同前)、すなわち人生を豊かにするもので、近代に根本として存在すべき個人の独立を補完し、また個人が集団となり、国家へ発展していく過程でひとつの核になるような存在であると捉えた。しかしながら、それは明治政府による近代国家形成のための正しい家族像とはなり得なかった。家父長制度のもと個人が抹消される集団こそが、理想的家族となっていたのである。

パネリストには福沢諭吉の経済論や家族論について論文をまとめられているマリオン・ソシエ氏(フランス国立東洋言語文化大学日本学研究所プロフェッソールアグレジェ)、福沢の女性論・家族論に関する著作の英語訳を進められているヘレン・ボールハチェット氏(慶應義塾大学経済学部教授)、福沢の男女交際論を中心に論文を書かれ、著作の韓国語訳も進められている宋惠敬氏(韓国高麗大学校日本研究センター研究員)を迎え、まずソシエ氏が福沢差出書簡を用いながら父福沢からみた子どもとの関係を、次いでボールハチェット氏が子や孫たちの回想録や聞き書きを中心に、子どもからみた父との関係を、そして宋氏が福沢の男女交際論を踏まえなが

ら現在の韓国における家族の諸問題について報告した。

ソシエ氏は福沢が『福翁自伝』において自分の家庭を紹介するのは、民法公布の時期に近代家族のモデルを示す意図があったのではないかと考える。そこで描かれたのは明るい新しい家族像であった。福沢は子どもたちに対しても「一身独立」を重視し、親子間でも相手の意思を尊重しようと考えながらも、実際に長男次男の米国留学中に2人に送った手紙を見れば、親としての感情を抑えることはできず、たとえば長男の国際結婚の願望に対して過干渉になるといった姿が見られることなどを指摘し、学者福沢諭吉と父親福沢諭吉の差異を論じた。

ボールハチェット氏は、子どもたちから見た「秘密がない」大家族の様子や、家族団欒を大切にしながら子どもの自主性を尊重するはずの福沢の子育ての実際と、著作内容との矛盾などについて論じた。著作に描かれるのは男性と等しく自立する女性だが、現実にはたとえば娘たちの結婚相手は福沢が探すなど、様々な場面で過保護な親の面を見せている。また上級武士の家で育った妻錦には、家族で過ごすことも多い下級武士の家庭に育った福沢が抱く家族のイメージを真に理解することはむずかしかつたと考えられ、折り合えなかった部分は福沢が自分の意に反しても錦に従わざるを得なかった面があり、福沢には子どもを愛するゆえのジレンマから生じる様々





な問題が見えると報告した。

最後に宋氏は、福沢の男女交際論は新しい概念で、配偶者を選ぶにあたって当事者の自由な意志を最も重視するといった主張が、当時の人々に強い衝撃を与えたであろうことを述べ、対話を求め愛しあい敬しあう関係を求める福沢の理想的な夫婦像と親子像をあわせれば、福沢が考える家族とは、家族成員に「精神的疎通」と「情緒的な紐帯感」が存在することであると指摘した。それは、封建社会の残滓がある当時の社会に閉じ込められていた人間関係、家族関係に新しい光をあたえた先駆的な見解ではないかと述べ、対比して現在韓国で起こっている離婚率の上昇、国際結婚の増加とその離婚率の高さ、DVの増加といった問題を報告した。特に過剰な教育熱から、英語を学ぶために海外へ子どもと妻を送り出し、一人で生活しながら仕送りを続ける夫が社会問題になっていること、彼らは一人韓国に残って外国にいる妻子を恋しがっていることから、夫婦の情が深いといわれている鳥キログ（雁）になぞらえてキログパパと呼ばれていること、安定した経済力と比較的余裕のある職業でいつでも外国の妻子に会いにいける父親は鷺パパと呼ばれ、韓国で必死に仕事をして経済力が足りず子どもに会いに行けない父親はペンギンパパと呼ばれることが紹介された。また高校生たちは深夜まで学校や塾で学ぶため、家族とのコミュニケーションは充分にとれず、それを緩和するために夜10時を超えて深夜授業をしている塾を申告すると国家からお金がもらえる制度までできたことが報告された。子どもと親は無制限競争を強いられており、家族が犠牲になっている現状を考えると、今、一世紀余りに福沢が提起した「精神的疎通」と「情緒的紐

帯感」を保つための具体的な努力をするべきではないかと結んだ。

各人の報告のあとはパネリストたちによる討論、ついでフロアからの質問を受けながら参加者も交えての討論が行なわれた。質疑応答では、福沢が娘たちを学校に通わせなかったなど言行不一致をどうみるか、福沢家は大変裕福であり、金銭的余裕のない庶民には福沢が言ったことを実行することは可能であったのかといった点についてやりとりがあった。福沢家の教育については、錦の影響力が強いと思われること、江戸時代には階層差も大きく農家の女性は士族の女性に比べてより自由であったと考えられること、福沢は変革を進めるために、その中心を担う階層をまず変えたいと思っていたのではないかなどの意見が出された。2時間という限られた時間であったため、十分な議論ができなかったが、それでも時間が大変短く感じられる活発なセミナーとなった。

最後に、参加した友人名城大学渋井康弘氏から、思想と行動の分析もひとつの課題ではあるが、J・S・ミルの女性論がそうであるように、福沢の女性論もまた近代的な個人一般に通用する理論としてその理想の姿が説かれたものであり、その理想が今日どこまで実現し、さらに近づけるためにはなにをすべきかを考える必要があるのではないかと指摘を受けた。まさにそこに現代に福沢の女性論を問う意味があると考えられ、今後もこのようなシンポジウムやセミナーを開きながら、取り組んでいきたいと思う。



左より、ボールハチェット氏、ソシエ氏、宋氏、西沢、米山所長

「歴史としての野坂参三」



わだ はる き
和田 春 樹
(東京大学名誉教授)

私は1963年に同じ題名の本を書いた（平凡社）。10年以上も経って、野坂の母校の慶応大学で野坂についてお話できることは、大きな喜びである。

野坂参三はロシア革命の年に大学を卒業し、中国革命の勝利の3年前に中国から帰国した。二つの革命の時代に生きた人だと言っていい。資本主義社会に矛盾があり、世界戦争が人々の運命にのしかかっている。そういう時代状況と闘う道に社会的にめぐまれた立場の青年が飛び込んでいき、ソ連、米国、中国と国境を越えて活動した。これは慶応大学卒業生の国際的な活動のひとつの顕著な事例だといえる。

野坂は1892年山口県萩の商人の家に生まれ、早くに両親と死別、長兄（のちモロゾフ社社長）の養子先葛野家に引き取られた。野坂は慶応在学中に社会主義思想を受け入れ、卒業とともに友愛会書記となった。1919年野坂龍と結婚したが、彼女の姉は内務官僚次田大三郎と結婚している。その後夫婦で渡英し、21年野坂は英共産党に入党した。モスクワ経由帰国したのち、22年日本共産党に入党した。23年と25年に逮捕された後野坂は日本共産党中央委員となったのである。28年三度逮捕され、2年後釈放されると、妻とともに、31年モスクワへ向かった。

野坂はソ連で労働者出身の山本懸蔵とともにコミンテルンの日本共産党代表となった。34年対日工作のため、米国に出張し、一時戻って、36年「日本共産主義者への手紙」を山本とともに書いたのち、ふたたび米国へ赴いている。

1937年6月からモスクワの日本人逮捕がはじまり、山本懸蔵も11月に逮捕された。38年2月には野坂龍も逮捕された。野坂は8月にモスクワへもどった。妻は釈放されたが、山本は裁判をうけ、39年3月死刑となる。その直前の2月22日に野坂がディミトロフあてに書簡を書いている。このことが問題となった。

ソ連が崩壊して、秘密文書があきらかになったとき、この書簡をモスクワで入手したジャーナリスト加藤昭がこれを山本密告の手紙だとして92年『週刊文春』9月3日号に暴露し、野坂非難の連載をはじめた。この非難を受けた共産党は最初野坂を名誉議長から解任し、年末の12月27日には党から除名した。私はこの過程に釈然とせず、94年3-5月に『思想』に論文を連載し、のちにそれを本にしたのである。私の主張は野坂の手紙は密告の手紙ではなく、弁護の手紙とすら考えられるものであるというものだった。私は2001年にモスクワでコミンテルンと日本に関する資料集を発行したが、その際1937年9月3日付けの、山本を密告したミフの手紙を公表した。加藤昭はおそらくこのミフの手紙の存在を知らず、それを隠して、野坂のあとの手紙を密告状にして発表したのである。攻撃は理不尽なものであったが、一言も反論せず、野坂を除名した共産党の態度も不当であった。

1940年3月野坂は中国延安に派遣され、脱走して八路軍についた日本人兵士の工作を開始した。日本人反戦同盟延安支部、日本労農学校、在華日本共産主義者同盟、日本人民解放連盟を組織した。やってきた米軍事視察団に戦後日本の革命において、天皇の退位をもとめ、天皇制打倒はめざさないと明らかにして、驚かせた。

戦争がおわると、野坂はモスクワを訪問し、打ち合わせた末、46年1月に帰国した。帰国早々、2月13日の『朝日新聞』で天皇退位論を主張した。当時南原繁東大総長も最高裁長官になる横田喜三郎教授も天皇退位論を出していたので、もしも共産党が一致して、野坂の説をうけ入れていれば、戦後の歴史は変わったかもしれない。

（本稿は2010年1月14日に行われた2009年度秋学期福沢研究センター講演会の概要である。）



未来をひらく福沢諭吉展 福岡展・展示報告

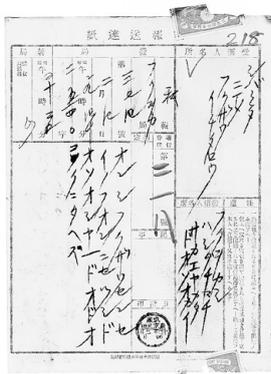
とくら たけ ゆき
都 倉 武 之
(福沢研究センター専任講師)

昨年東京・福岡・大阪と巡回した「未来をひらく福沢諭吉展」では、共通の図録が作成されたが、実際は福岡・大阪で展示物に多くの追加を行った。その意図については福岡市美術館の担当学芸員岩永悦子氏が本紙11号に寄稿して下さったが、追加展示品は会場で配られた展示リスト以外に記載されていない。そこで本紙に一覧を掲げ、参考に供したい。各資料には、資料番号／資料名／年代（無記載は未詳）／所蔵（無記載は福沢研究センター蔵）と簡単な解説を付した。

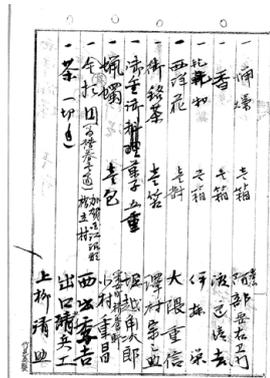
□福沢の死に対する九州での反応

第1部あゆみだす身体には、第3節「福沢諭吉の死と九州の人々」を加え、福沢の死に対する九州人の反応を通して、九州との強い繋がりを表現した。

- 1-FK-01 福岡慶應義塾同窓会電報
明治34年2月4日午後7時50分発、9時着
福沢死去との報道に対し、東京にいる高弟小幡篤次郎に真偽を尋ねる。
- 1-FK-02 弔電（福岡慶應義塾同窓会）
明治34年2月4日午後9時40分発、10時25分着
訃報の返信を受け、福沢一太郎に弔意を表す。



「同窓者一同慟哭に堪はず」とある
(1-FK-02)



右から4番目に大隈の名と「西洋花」(1-FK-07)

- 1-FK-03 弔電（福岡・高橋光威）
明治34年2月4日午後9時40分発、11時5分着
高橋は、福岡日日新聞（現在の西日本新聞）主筆の塾員。西日本新聞は本展の共催者であった。

- パネル 福沢死去を報じる『福岡日日新聞』
明治34年2月5日
福沢の肖像を掲げ、死去の第一報を報じる紙面。
- 1-FK-04 弔電（沖繩・高嶺朝教）
明治34年2月7日午後5時37分発、11時40分着
高嶺は沖繩初の近代新聞『琉球新報』（現存同名紙とは別）創刊、沖繩銀行設立で知られる実業家で塾員。
- 1-FK-05 弔辞（韓国留学生有志）／光武5年2月8日
韓国留学生たちから送られた漢文の弔辞の一つ。
- 1-FK-06 弔辞（山口県慶應義塾社中・交詢社員一同）／明治34年3月9日
四十九日にあわせて行われた追悼会から送られた。
- 1-FK-07 香典帳／明治34年2月
遺族は生花を謝絶したが、大隈重信からの生花だけは受け取ったというエピソードを証明する記録。

□福沢と漢学・蘭学

福沢の学問形成及び慶應義塾史を扱った第3部ふかめゆく智徳では、中津における福沢、特に漢学の系譜上の福沢の位置や、福沢家の家風に関する展示を追加した。

- 3-FK-01 福沢百助「泉育堂詩稿」／文政元—天保3年
父百助の詩文集。冒頭にある、物乞いに来た乞食を深く憐れみ、社会のあり方に思いをいたす詩を展示。
- 3-FK-02 福沢諭吉「浴後」書幅／慶應義塾図書館
貧しい中でも強く生きた少年時代を思う漢詩。
- 3-FK-03 中村栗園写真／明治13年
百助の親友。福沢一家が大坂から中津に帰る際、安治川口まで諭吉を舟で抱いていた人。
- 3-FK-04 福沢三之助「送小幡君省叔父病之東都」
諭吉の兄三之助の数少ない自筆資料。
- 3-FK-05 白石照山書幅「文王官人英才宣力 周公吐哺天下帰心」／大分・福沢旧邸保存会
最も長く漢学を習い、強い影響を受けた儒者の双幅。
- 3-FK-06 亀井南冥肖像／福岡・能古博物館
福岡の儒者。白石照山が心酔していたと『福翁自伝』に言及されている。
- 3-FK-07 亀井昭陽肖像 尾形愛遠筆／天保7年
福岡・能古博物館
南冥の長子。父子の学風は、事物を実証的に探求する福沢の姿勢に影響を与えた。著名な肖像の原本。
- パネル 福沢諭吉の漢学系譜
福沢に繋がる漢学者の系譜。十分練られたものではないが同種の図は従来ありそうでなかった。（次頁）
- 写真パネル 大分・耶馬溪競秀峰（現状）
福沢が保存に尽力した郷里の景勝地。



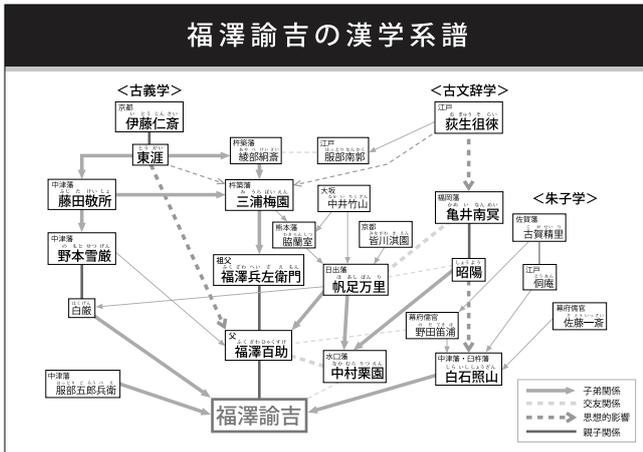
亀井南冥(左) 昭陽肖像(各部分) / 能古博物館蔵 (3-FK-06/07)

- 写真パネル 蘭学留学の地・長崎光永寺(現状)
初めて蘭学に触れた地・長崎に残る最初の下宿地。
- 3-FK-08 『Nederduitsche Taal 訳鍵』/文化7年
初学者向け蘭日辞書。長崎を出たが諫早で金がなくなった福沢が、旅費のために売ったものと同じ本。
- 3-FK-09 「安政三年御留守日記」(中村諭吉遊学願)
安政3年8月4日条/中津市立小幡記念図書館
福沢が藩に出した願書の記録。「蘭学修行」では許可されず、緒方洪庵の元へ「砲術修行」に行くこと記す。
- パネル 福沢諭吉九州における足跡
中津→長崎→大坂への経路マップと、九州各地の福沢関連史跡の所在を示す。

□ 『学問のすゝめ』と中津市学校

同じく第3部において、大ベストセラー『学問のすゝめ』が本来郷里の中津市学校設立のために書かれたものであることを紹介し、同書の様々な形態を展示した。

- 3-FK-P03 旧中津市学校正門(現南部小学校生田門)



- 現在も残る中津市学校当時の門。
- 3-FK-10 「中津市学校之記」原稿/明治4年
旧藩主奥平昌邁名義の開学趣意書。他筆浄書への福沢加筆原稿。
- 3-FK-11 『学問のすゝめ』初編(再版)・版木
明治5年/慶應義塾中等部(版木)
活版印刷である初編初版(巡回展に出品)に次いで発売された平仮名版版本と、冒頭部分の版木。
- 3-FK-12 『学問のすゝめ』初編(片仮名)・版木
明治6年
平仮名版の次に発売されたカタカナ版と冒頭版木。
- 3-FK-13 『学問のすゝめ』(合本)/明治13年
初編から17編までを1冊にまとめた活字版。

□九州における福沢山脈と人脈

第4部きりひらく実業において、九州出身で福沢と縁のある人物を紹介した。

• パネル 九州・山口における福沢山脈・福沢人脈

山口県：伊藤欽亮/福岡県：七里恒順/長崎県：長与専斎/佐賀県：林毅陸/大分県：小幡英之助/熊本県：本山彦一/宮崎県：内藤政挙/鹿児島県：山名次郎/沖縄県：太田朝敷

□西郷と福沢

第5部わかちあう公においては、九州の代表的人物として西郷と福沢の関係についてコーナーを設けた。

- 3-19-A 『慶應義塾入社帳』(保証人欄に「西郷吉之助」)
明治6年4月18日/慶應義塾図書館
薩摩出身者に慶應義塾入学を促したといわれる西郷が、入学者の保証人になっている例を展示。
- 5-FK-01 福沢諭吉「西郷隆盛の処分に関する建白書」草稿写本/明治10年
西南戦争の休戦と裁判所設置による公平な審判を求めた建白。福沢が旧中津藩士族の名義で提出させた。
- 5-FK-02 『明治十年丁丑公論・瘠我慢の説』
明治34年
西郷に対する日和見的世論に憤った福沢が、密かに認めた論説を収録する刊本。
- 5-FK-03 『皇室論』/明治15年
皇室を政治と切り離して仰ぐべきと主張する福沢著作。この1点は時事新報のコーナーに展示。

(大阪展については次号に掲載いたします。)

平成21年4月から平成22年2月までの間に福沢研究センターに収蔵された資料のうち、主なものを紹介します。多くの方々から塾員関係資料をいただきましたが、すべての資料をご紹介することができず、申し訳ありません。

*物故者の敬称は略させていただきました。

福沢諭吉関係資料

■ 遺墨「積財如上山 散財如下山 熱界人多少 誰能上下山」

関防印は「無我他彼此」落款は「三十一谷人」「福沢諭吉」。他に「明治卅貳季後之福翁」が捺されている。寄贈者の祖父森晋太郎の旧藏品。森晋太郎は、明治37（1904）年特選塾員。『時事新報』記者。

■ 北沢楽天漫画「福沢先生若き日本に西洋文明を教ふ」

【Annette Karsh 氏寄贈】

北沢楽天（1876-1955）は、最晩年の福沢に見込まれて時事新報に入社して活躍、日本近代漫画の祖とも称される漫画家になった。

■ 神川松彦宛小泉信三書簡 昭和39（1964）年3月22日付

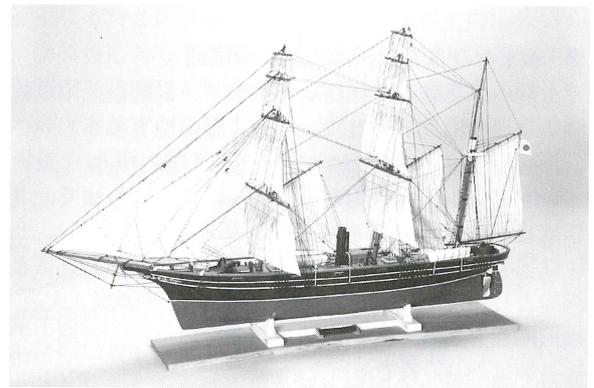
【神川ときよ氏寄贈】

神川松彦は東京大学教授。福沢の言葉を知らせてくれた神川に対し、残念ながら「心訓」とよばれる偽物であることを伝える。

■ 咸臨丸1 / 50模型

【吉澤駿之介氏寄贈】

万延元（1860）年、条約批准のために派遣された幕府使節団の護衛艦。福沢は軍艦奉行木村摂津守喜毅の従僕として乗船し、はじめて西洋を目にした。本年は渡米より150年目に当たる。



時事新報関係資料

■ 時事新報社編『日本美人帖』 明治41（1908）年

【購入】

福沢創立の日刊新聞『時事新報』は、アメリカのシカゴ・トリビューン紙の求めに応じ、明治41年に日本最初の美人コンクールを行い話題となった。本書は入賞者の写真集。

学生関係資料

■ 明治33（1900）年4月慶應義塾第3期成績表・明治35年4月慶應義塾成績表

【近藤建一氏寄贈】

各表紙には『明治三十三年四月 慶應義塾 大学部中第一第二学年 普通部 幼稚舎 各学年第三期成績表』『明治三十五年四月 慶應義塾 大学部第一、第二学年 普通部各学年 成績表』とある。慶應義塾では明治4年以来、成績表を「学業勤惰表」もしくは「学業勤怠表」と称してきたが、明治31年第1期（5月～7月）から成績表と改称した。

■ 森新太郎旧蔵慶應義塾塾生集合写真 11枚 大正後期

【森利子氏寄贈】

大学時代の英語劇の写真もあり、女子学生がいなかったため男子学生が豪華に女装して演じているのがおもしろい。

■ 鎧球（アメリカンフットボール）部ジャージ・バックル 昭和戦前・戦中期

【菅野正二郎氏寄贈】

体育会アメリカン・フットボール（鎧球）部は、昭和10（1935）年創立。旧蔵者は、昭和15年の大学予科入学とともに入部、戦時下で敵性スポーツとされ苦労が多かったという。選手には戦死者も多く出た。この試合用ジャージは代々の部員に受け継がれたもの。

■ 慶應義塾大学経済学部卒業記念バッチ 昭和28（1953）年度

【相馬正和氏寄贈】

いつの時代も学生たちは、揃いのグッズが好きであり、戦前から戦後にかけてはバックルやバッチなどが流行した。

❖ 主な動き

■ 小泉信三記念基金による研究助成

今年度から小泉信三記念慶應義塾学事振興基金により「小泉信三とその時代に関する研究」について研究助成が行われることになったが、当センター准教授・西沢直子を研究代表者とする共同研究「『小泉信三とその時代』研究のための基礎的資料の収集・整理」が助成対象研究となった。その最初の成果として、『小泉信三書簡 / 岩波茂雄・小林勇宛全百十四点』(近代日本研究資料第9輯)が3月15日に刊行された。収録書簡114点のうち、岩波茂雄宛62点中61点、小林勇宛52点中13点が新出である。

共同テーマが示しているように、小泉信三に関連する新しい資料の収集も行われているが、今年度はすでに当センターに小泉家から寄託されている資料の整理が主に行われた。

■ 「未来をひらく福沢諭吉展」の巡回

上野の東京国立博物館から始まり、福岡市美術館に巡回した福沢展は、その後、福沢生誕の地である大阪へと会場を移し、8月4日～9月6日まで大阪市立美術館(天王寺公園内)で開催された。これに合わせて、5日には当センター西沢准教授が「福沢諭吉と大阪」、8日には当センター顧問の寺崎修名誉教授が「浄土真宗と福沢諭吉」、9日には当センター都倉専任講師が「大阪人・福沢諭吉」と題してそれぞれ講演を行った。会期中の入場者数は28,000名であった。

また、前号でご紹介した「福沢諭吉と神奈川」展が8月22日～9月23日まで神奈川県立歴史博物館で開催された。入場者数は16,500名であった。

■ 『福沢諭吉事典』の編集状況

『慶應義塾史事典』(『慶應義塾150年史資料集』別巻1)に続き、急ピッチで『福澤諭吉事典』(別巻2)の編集作業を進めている。現在は原稿執筆を進めるとともに、すでに提出された原稿の検討を行っている。編集委員会は月に一度のペースで行われているが、昨年9月には合宿を行い、3月にも第2回目の合宿を予定している。2010年12月の刊行を目指している。

■ 大阪での福沢研究センター講座

昨年度に続き、大阪リバーサイドキャンパスにおいて慶應義塾福沢研究センター講座を開催した。「近代日本と福沢諭吉」と題して、7月18日から本年1月30日にかけて月に1回、合計7回の講座を開講した。最終回には茶話会を開き、当日に講師を担当した当センターの米山所長、第2回を担当した都倉専任講師が出席し、参加者と意見交換をした。

■ 講演会、セミナーの開催

昨年8月29日、神奈川県立歴史博物館で開催された

「福沢諭吉と神奈川」展に合わせ、「家族とは何か―福沢諭吉の女性論・家族論を通して現代を考える―」と題して同博物館にてシンポジウムを開催した(4-5頁)。

また、本年1月14日には、秋学期講演会を三田演説館で開催。和田春樹東京大学名誉教授の「歴史としての野坂参三」と題する講演が行われた(6頁)。当センターの講演会は、これまで明治期に関わるテーマが多く、昭和期を主な対象とする講演会をはじめてであったが、70名以上の参加者があった。

■ 『近代日本研究』第27巻の編集

第26巻から発行を1ヶ月早めることとした。編集作業は順調に進み、本年2月28日に刊行した。論説5本、研究ノート2本その他、翻訳、講演録、資料紹介各1本が掲載されている。2月3日に開催された第27巻編集会議では、2010年が福沢生誕175年、緒方洪庵生誕200年にあたることから、「福沢生誕175年 福沢と大阪」と題する特集を組むことになった。投稿原稿の申込み締め切りは4月30日、原稿締め切りは8月20日とした。

■ 文部科学省研究拠点形成費等補助金への申請

本年度の標記補助金(教育研究高度化のための支援体制整備事業)に対して、福沢諭吉関係一次資料の整備、幕末・明治期の版本整理、福沢著作の翻訳、ホームページのリニューアル、の4つのプロジェクトを申請した。今年度のみでの交付であるため、作業は3月までに終了する予定である。

■ 実習生の受入れ

学習院大学からの依頼を受け、同大学大学院アーカイブズ専攻の学生1名を10月20日～12月2日の期間中に、計10日にわたり受け入れた。実習内容は図書業務、資料の整理方法、関連部署の見学などであり、センターとしてははじめての試みであった。

■ スペース狭隘化対策

かねてより資料保存スペースの不足が深刻化しているが、同様の問題を抱える複数の部署に対して、1月はじめに担当理事から必要スペースの算定をするよう指示があり、2月4日に管財部を交えて関連部署の最初の会合が開かれた。

■ 全国大学史展への協力

全国大学史資料協議会東日本部会の主催で全国大学史展「日本の大学―その設立と社会」が、1月15日～2月14日まで明治大学博物館特別展示室で開催された。約60の国立、私立大学から集めた創立当時の資料が展示され、会員であるセンターからも2点を貸し出した。

■ 諸会議

- *平成21年度第2回運営委員会(10月27日)
- *平成21年度臨時運営委員会(12月22日)
- *平成21年度第2回センター会議(12月10日)
- *執行委員会(10月8日、2月23日)
- *『近代日本研究』第26巻編集委員会(9月25日)、第27巻編集委員会(2月3日)
- *小泉基金運営委員会(1月28日)
- *『福澤論吉事典』編集委員会
合宿(9月12～13日):クロスウェーブ東中野
第26回(11月3日)、第27回(11月20日)、第28回(12月25日)、第29回(1月26日)
- *創立150年記念展覧会実行委員会(最終)(10月26日)
- *ワークショップ「近世・近代の国制における天皇の位置」
・<近世近代史研究交流会との合同開催>(9月10日)
「18世紀の朝廷財政と朝幕関係」
報告者:佐藤雄介氏(東京大学大学院生)
「近代国民国家の成立と精神的基盤―井上毅を中心に」
報告者:松居宏枝氏(お茶の水女子大学大学院生)

■ 人事

<事務局>

- 退職 杉原 優(事務嘱託) ～2月28日
- 坂井博美(非常勤嘱託) ～10月31日

■ 展覧会・展示会開催

- *「未来をひらく 福沢論吉展」(8月4日～9月6日:大阪市立美術館)
- *「福沢論吉と神奈川」展(8月22日～9月23日:神奈川県立歴史博物館)
- *第175回福沢先生誕生記念会展示(1月10日:図書館旧館展示室)

■ 展示協力・見学受入

- *SFC高等部の学部説明会・キャンパス見学に協力(12月11日)
- *「全国大学史展 日本の大学―その設立と社会―」(1月15日～2月14日:明治大学)に資料貸出、受付当番に協力
- *鳥取市歴史博物館奥村寧子氏資料借用の件で来訪(1月25日)
- *大谷大学真宗総合研究所大畑博嗣氏、見学のため来訪(2月4日)

■ 出張・見学(以下、西沢は西沢准教授、都倉は都倉講師の略)

- *「未来をひらく 福沢論吉展」(大阪市立美術館)関連
 - ・米山所長、都倉、内覧会に出席(8月3日)
 - ・赤堀係主任、全国大学史資料協議会西日本部会研究会の大阪展見学会に出席(8月5日)
 - ・都倉、適塾記念会・大阪大学、洪庵記念会、西川隆夫氏に資料返却(9月10日)
 - ・西沢、交詢社へ資料返却(9月17日)
 - ・石井非常勤嘱託、吉岡調査員、長野丸子郷土資料館等へ資料返却(9月29日)
 - ・都倉、長野県安曇野の個人宅に資料返却(10月1日)
 - ・都倉講師、平塚文学部非常勤講師、北海道浦河の赤心社記念館に資料返却(10月21日)
 - ・都倉、横山調査員、愛媛県吉田町村井幼稚園に資料返却(11月6～7日)
- *「福沢論吉と神奈川」展(神奈川県立歴史博物館)関連
 - ・西沢、都倉、北九州市立自然史・歴史博物館(小倉)より資料借用(8月10日)
 - ・都倉、早大図書館、義塾理工学部より資料借用(8月19日)
 - ・米山所長、西沢、都倉、酒井事務長、赤堀係主任、山根非常勤嘱託、センター調査員(柄越、堀)、内覧会に出席(8月21日)
 - ・西沢、都倉、撤収作業(9月24日)
 - ・都倉、矢上・日吉キャンパス、鉄道博物館、早大図書館に資料返却(9月25日)
 - ・西沢、松崎事務嘱託、北九州市自然史・歴史博物館に資料返却(10月16日)
- *赤堀係主任、第21回デュアルシープ・セミナー(DNP主催)に参加(9月9日)
- *都倉、福岡市美術館に預けていた展覧会展示資料返却のため大分県立先哲史料館、および中津の福沢記念館(9月16日)
- *都倉、酒井事務長、貸出中の書幅を受け取りに中津の福沢記念館(9月17日)
- *赤堀係主任、第96回 全国大学史資料協議会東日本部会幹事会、全国研究会に出席(9月17日:国学院大学)
- *米山所長、西沢、都倉、酒井事務長、「夢と追憶の江戸」展(三井記念美術館)内覧会に出席(9月18日)
- *酒井事務長(10月14日)、赤堀係主任(10月14～16日)、全国大学史資料協議会全国総会・研究会に出席(国学院大学)

- *都倉、地下壕関係資料引取りのため日吉(10月14日)
- *調査員、第3回資料保存シンポジウム(江戸東京博物館)に参加(10月16日)
- *米山所長、柄越調査員、「幼稚舎疎開の碑」式典に出席のため青森県木造(10月16～18日)
- *西沢、松崎事務嘱託、調査のため中津の小幡記念図書館、福沢記念館(10月17日)
- *西沢、実学博物館開館式出席のため韓国南陽洲訪問(10月22日～25日)
- *米山所長、東洋大学井上円了記念学術センター運営委員会に出席(10月29日、2月4日)
- *都倉、赤堀係主任、第27回雄松堂フォーラム(第11回図書館総合展)に参加(11月10日:パシフィコ横浜)
- *都倉、全史料協全国大会(福島県歴史資料館)に参加(11月17日～19日)
- *西沢、都倉、個人宅にて所蔵資料を拝見(12月9日)
- *都倉、ラジオニッポンで番組の収録(12月17日)
- *米山所長、西沢、都倉、酒井事務長、早稲田大学大学史資料センターを見学(1月20日)
- *都倉、善福寺墓参に参加、千葉県長沼村関係者の付き添い(2月3日)
- *西沢、韓国放送通信大学で講義、梨花女子大、漢陽大学等を訪問(2月4日～6日)

■ 講師派遣

- *西沢、全国大学史資料協議会西日本部会の依頼を受け、大阪市立美術館にて「福沢論吉と大阪」と題して講演(8月5日)
 - *西沢、中津市古文書講座で「中津土族社会と福沢論吉」を講義(8月6日～7日)
 - *7月18日～1月30日にわたり、大阪リバーサイドキャンパスで開催されたセンター講座「近代日本と福沢論吉」(全7回)で所員(岩谷、都倉、樽井、小室、平野、米山)、坪川法学部専任講師が講義
 - *寺崎顧問、大阪市立美術館で開催中の福澤展で「浄土真宗と福沢論吉」と題して講演(8月8日)
 - *都倉、大阪市立美術館で開催中の福沢展で「大阪人・福沢論吉」と題して講演(8月9日)
 - *都倉、奥武蔵三田会講演会(駿河台大学共催)で講演(9月4日)
 - *西沢、「福沢論吉と神奈川」展(神奈川県立歴史博物館)でガイドツアーを行う(計3回)(9月5日)
 - *米山所長、江東区自悠大学(豊洲文化センター)で「学問のすすめ」と題して講演(9月9日)
 - *都倉、「福沢論吉と神奈川」展に合わせたウォーキングイベントで展示解説(9月18日)
 - *都倉、「福沢論吉と神奈川」展で来場者向け展示解説(9月19日)
 - *都倉、船橋三田会研究会で「脱亜論をめぐって」と題して講演(9月19日)
 - *西沢、中津市立小幡記念図書館開館100年記念で「小幡篤次郎が望んだこと～中津図書館創立100年に寄せて～」と題して講演(10月17日)
 - *都倉、横浜市港北区在住者、日吉台地下壕保存の会関係者のためキャンパスツアー実施(10月17日)
 - *SFC中高(5年生)の総合学習授業にサポート役として調査員を派遣:石井非常勤嘱託、堀調査員、横山調査員(10月22日)
 - *都倉、小山市中央公民館教養大学で「福沢論吉の反骨精神」(10月24日)、『学問のすすめ』を読む(10月31日)と題して講義
 - *西沢、小山市中央公民館教養大学で「福沢論吉と故郷中津」(11月7日)、「福沢論吉の女性論・家族論」(11月21日)と題して講義
 - *西沢、渋谷栄一記念財団長岡講演会で「一身独立と新しい家族―福沢論吉の女性論を通じて―」と題して講演(11月13日)
 - *西沢、中津で開催の福沢論吉記念祭全国高等学校弁論大会に審査員として出席(11月18日～19日)
 - *西沢、ワークライフバランスセンターのシンポジウムにパネリストとして参加(12月12日)
 - *米山所長、中津で開催の福沢論吉先生110回忌法要時記念講演会で「福沢論吉と社会教育」と題して講演(2月3日)
 - *西沢、幼稚舎でご命日講話(2月3日)
 - *米山所長、交詢社常例午餐会で「福沢論吉の教育論にみるリアリズム」と題して講演(2月5日)
 - *都倉、渋谷栄一記念財団主催のシンポジウム「宇和島と近代日本社会のリーダーたち」(宇和島市生涯学習センター)にパネリストとして出席(2月28日)
- 訃報
- *所員 藤田弘夫文学部教授ご逝去(10月14日)
 - *顧問 西川俊作名誉教授ご逝去(1月27日)

❖ スタッフ一覧

所 長	米山 光儀	教職課程センター教授	掛川トミ子	関西大学名誉教授
副 所 長	岩谷 十郎	法学部教授	片岡 豊	白鷗大学教授
	平野 隆	商学部教授	我部 政夫	山梨学院大学教授
専任所員	都倉 武之	福沢研究センター 専任講師	川崎 勝	南山大学教授
	西沢 直子	福沢研究センター 准教授	佐藤 正幸	山梨大学教授
所 員	池田 幸弘	経済学部教授	白井 堯子	千葉県立衛生短期大学名誉教授
(兼運営委員)	岩崎 弘	幼稚舎教諭	進藤 咲子	東京女子大学名誉教授
	梅垣 理郎	総合政策学部教授	曾野 洋	玉川大学准教授
	小野 修三	商学部教授	高木 不二	大妻女子大学短期大学部教授
	小室 正紀	経済学部教授	西田 毅	同志社大学教授
	沢田 達男	理工学部教授	浜野 潔	関西大学教授
	竹内 勤	医学部教授	平石 直昭	東京大学名誉教授
	樽井 正義	文学部教授	平山 洋	静岡県立大学助教
	林 温	同	藤原 亮一	田園調布学園大学教授
	山内 慶太	看護医療学部教授	堀 幸雄	
所 員	有末 賢	法学部教授	前坊 洋	東北公益文科大学准教授
	井奥 成彦	文学部教授	松沢 弘陽	
	牛島 利明	商学部教授	松田宏一郎	立教大学教授
	大久保忠宗	普通部教諭	宮村 治雄	成蹊大学教授
	太田 昭子	法学部教授	森川 英正	
	大塚 彰	志木高等学校教諭	山田 央子	青山学院大学准教授
	小川原正道	法学部准教授	林 宗元	韓国関東大学校教授
	加藤 三明	幼稚舎長	Craig, Albert	ハーバード大学名誉教授
	斎藤 暁子	女子高等学校教諭	Saucier, Marion	フランス国立東洋言語文化大学教授
	末木 孝典	高等学校教諭	Nguyen thi Hanh Thuc	ホーチミン市外国語情報科学大学講師
	Ballhachett, Hellen	経済学部教授		
	宮内 環	経済学部准教授	研究嘱託	遠山 隆淑
顧 問	飯田 鼎	名誉教授		田中 康雄
	河北 展生	同		金 眞淑
	小泉 仰	同		巫 碧秀
	佐志 傳	元高等学校教諭		三島 憲之
	坂井 達朗	名誉教授	事務局	酒井 明夫 事務長
	寺崎 修	同		赤堀美和子 係主任
	中村 勝己	同		望月麻実子 嘱託
	松崎 欣一	名誉教諭		松崎 佳美 同
客員所員	安西 敏三	甲南大学教授		印東 史子 派遣職員
	飯田 泰三	法政大学教授		石井寿美世 非常勤嘱託
	井田 進也	大妻女子大学教授		山根 秋乃 同
	區 建英	新潟国際情報大学教授		

他に、『慶應義塾150年史資料集』調査員、10名
(3月31日現在)

慶應義塾福沢研究センター通信 第12号

Newsletter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日 2010年3月31日 (年2回刊)
編 集 慶應義塾福沢研究センター
発 行
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
電 話 03-5427-1603
http://www.fmc.keio.ac.jp/
印 刷 (有) 梅沢印刷所